

あぱっさ



vol.32
フウラ詩びこの精選

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体 Rainforest Foundation Japan

〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20

TEL: 03-5481-1912 FAX: 03-5481-1913

MAIL xingu@rainforestjp.com HP www.rainforestjp.com

[ご住所等ご変更ございましたらご連絡いただけますと幸いです]

HOW TO HELP

年会費	大人	5,000円
	18歳以下	3,000円

年会費・寄付金振込先

口座名	熱帯森林保護団体
ゆうちょ銀行	郵便振替口座 00140-3-144187
三井住友銀行 東京中央支店	普通口座 7066247

※ 銀行振込の方は、必ずお名前とご連絡先を別途、当団体までご一報をお願い致します。

■ コロナ感染

南 研子

世界中でコロナウィルスが未だ猛威を奮っている。どこか人ごとのように思っていたが、まさか我が身に降りかかるとは想像もしなかった。8月のお盆の頃、同居している息子がコロナ感染。その1週間後には私が呼吸困難、意識朦朧で関東中央病院へ緊急搬送。かなり深刻な肺炎になり、入院時から酸素マスクを着用。10日間のステロイド治療に入った。40年近く病院の世話になったこともなく、2000日以上を過酷なアマゾンで過ごし、健康であることが当たり前になっていただけにショックだった。感染症隔離病棟、レッドゾーンと大きな表示。4人部屋には私と同世代の人と認知症で動けない年配の方。若いお母さんは入院するなり医者に「3歳と5歳の子どもが家にいます。帰してください」と号泣。皆、夜中に酷い咳をしていた。コロナに感染したい人なんて誰もいない!しかし、誰もが感染してもおかしくない。ワクチンを打ったからと言って問題は解決しないし、差別がうまれる。

今回、周囲の反応も様々だった。人まるで犯罪者扱いした友もいた。そうかと思えば、数時間対応が遅れていたら取り返しのつかない状態になっていた私を、息子と我が娘のようなスタッフの的確な判断で命がつながった。毎日、いろんな人からのガンバレレターやエネルギー、書籍を病院に届けてくれた友人たちやスタッフ。思いやりや人の優しさが身に染みてありがたく涙した。森を守る同志であるラオニーやメガロンたちからの熱き激励メッセージも届く。外部と遮断された孤独な空間で病魔と向き合う長い日々、このレターやエネルギーでどれだけ元気をもらったことか計り知れず、ボロボロになるまで読み返した。

今後コロナ禍の対応策を早急に進めなければいけないが、一番重要なことは何故?このような状況になったかを根本的に考える必要がある。酸素供給源であるアマゾンの熱帯林を経済優先の論理を掲げ、猛烈なスピードで破壊し続けている。生きとし生ける全てのものにとって酸素無くしては生存できないことを、今回私は身を持って痛感した。世界的な異常気象を引き起こす人為的要因は、物質文明に浸り切って、自然への畏敬の念を忘れ、目先の便利さを追求してきた私たち一人一人の欲が、大きな魔物を生み出し、コロナウィルスという形で個々に突きつけられているように感じる。インディオの人と共にアマゾンの自然を守ることの大切さを、今回かなりハードな体験ではあったが再認識できた良い機会だったので、私はコロナ感染したこと感謝している。

■ フェイスブックの中のヤノマミ

2020年の秋だった。ヤノマミ族を支援する団体が保護区内のコロナ陽性者の詳細を発表した。その中に、かつて私が滞在した集落の名もあった。集落を知る人たちに片っ端からメールを送った。数日経ってからようやく一つだけ返事が来た。「大丈夫。今朝無線で連絡したら、母が、みんな元気だと言っていた」トゥイーラからだった。

彼女と最後に会ったのは2008年の12月、その時、トゥイーラはまだ十歳にも満たない少女だった。それは最後の口ヶ時で、私たちは集落の外れに建てられた保健所で、いつ来るかも分からぬ帰りのセスナを待っていた。そこに、母親に手を引かれたトゥイーラがやってきた。母親が片言のポルトガル語で言った。「この娘も街を知るべき年になった。セスナに乗せてやってくれ」集落では指導者予備軍とも言うべき若者たちを街に送り始めていた。州都ボア・ビスタの政府機関やヤノマミ族自身が設立した涉外団体に寝泊まりをしてポルトガル語とブラジル社会を学ぶのだ。

トゥイーラは女性としての最初の「留学」生となるようだった。だがそれは、宿命づけられた留学だったのかもしれない。彼女はヤノマミ族のリーダーであるダビ・コペナワ氏の長女なのだから。私は、セスナが到着したときの光景を忘れることがない。トゥイーラは腰巻を付けただけの伝統的な恰好をしていた。すると、母親が半ば強引に娘に服を着せ始めた。膨らんではない乳房にはブラジャーさえもつけられた。街に行くのだから街の恰好をしなさい、ということのようだった。少女はずっと下を向いたままだった。機内でも街についてからの車内でも、何度か話しかけてはみたものの、彼女は一言も喋ろうとはしなかった。それから、何度も留学を経たのだろう。彼女はボア・ビスタの看護学校で学ぶ学生になっていた。彼女からFBで友だちの申請が来たのは2016年だったと思う。名前には記憶があったが服装や顔立ちはすっかり別人になっていた。

今も、トゥイーラとのやりとりは定期的に続いている。つい先日きたメールには「日本に関心がある。日本に行きたい」とあった。「私の住む町は、今、氷点下七度」という返事に添えて、札幌の雪景色を張り付けて送った。すぐに返信が来た。マスクをつけた自撮りの写真とともに、吃驚顔の絵文字が携帯の中で踊っていた。



ガリンペイロ

国分拓／著
新潮社 1,870円(税込)

ラオニ長老からのメッセージ ~IUCN名誉会員の称号受賞に寄せて~

IUCN(国際自然保護連合)で、カヤボ民族ラオニ長老が名誉会員の称号を授与されました。
これは4年に1度、自然と天然資源の保護に多大な貢献を果たす個人を表彰するものです。

あなたたちに再びメッセージを伝えたい。私が常に言い続けてきたことだ。ずっと以前から、若い頃から私は皆に言い続けてきた。我々の間に戦争は二度と起きて欲しくない。私は平和に皆が生きることをただ望むだけだ。そう私は言い続けてきた。私は疲れている。私は十分に老いてしまった。私たちの祖先が、この大地の先住者だ。あなたたちは後から来た。あなたたちは我々の祖先の豊かな財の全てを奪い取った。あなたの物ではない豊かさを。私は悪しきことが嫌いだ。悪しきこととは何か。それは脅嚇である。あなたたち白人(非先住民の意)は殺し合う。あなたたちは森を破壊する。それは悪行だ。とても悪しきことだ。私たち先住民族にとって。しかし、あなたたち白人にとっては良きことなのだろう。かつて私たち先住民は森の中で暮らしていた。まだ青年だったころ、私は森を自由に歩いた。我々は移動民族だった。いま我々は決まった場所で生きるしかない。だから私は言いたい。私の言葉を聞け!その行きをやめろ!私たちが平和に生きるために!そう言い続けるのが私の務めだ。

ありがとう。 ラオニ・メトゥティレ

日本語訳：下郷 さとみ



2021年9月

「あぱっさ」32号2021年10月発行

NHKディレクター 国分 拓

支援事業、そしてアマゾンのいま

ジャーナリスト／支援事業コーディネーター
下郷 さとみ

ブラジルで猛威を奮い続けてきた新型コロナ禍の影響によって、現地視察は昨年に続いて今年もかないませんでした。しかし現地では、先住民の人たちが着実に、元気に事業を進めています。また今年8月から9月にかけては、首都ブラジリアで先住民による大規模な抗議行動が行われました。さまざまな困難の中でダイナミックに動くアマゾン先住民族のいまをご報告します。

養蜂事業

アマゾンの森の恵みのハチミツが今年もたくさん採れました



収穫した蜂蜜(70kg)



ハチミツの収穫作業

消防団事業

団員たちの活躍で今年は森林火災を最小限に食い止めました

今年もアマゾンでは森林火災が多発し、特にアマゾン北部と西部で被害が深刻となりました。いっぽう当団体の支援対象地では、幸い目立った火災はありませんでした。昨年は消防団本部周辺の森で9月に発生した火災が1ヶ月近く延焼し続けるという事態となりましたが、この経験を踏まえて今年は例年より1ヶ月早く活動を開始し、また迅速な初動に努めたことが大きく功を奏しました。

9月はじめには、ある村で落雷による火災が発生し、何軒もの家屋が全焼する被害がありました。村人から無線連絡を受けた団員たちがボートでかけつけて延焼の防止や住民の救援に働きました。この季節に落雷雲が発生するのは珍しく、地球規模で進む気候変動の影響をうかがわせます。アマゾンの森でも近年、乾燥化と高温化、雨期の少雨などの異常気象が頻発し、森林火災が深刻化しています。消防団の活動的重要性はますます増すばかりです。

若者たちの主体性の発揮が成功のひけつ

先住民による消防団活動は他の地域にもありますが、その大部分が政府主導によるもので、政府消防隊の指揮のもとで先住民が日給作業員という形で働く、というスタイルです。しかし、当団体が支援する消防団事業はそれとは全く異なり、先住民自身で結成し、彼ら自身が主体的に運営してきました。2019年のボルソナロ政権発足以降、自然保護や森林火災防止予算の大幅削減が続き、他地域での消防団活動は危機に瀕しています。しかし先住民自身が主体性を発揮する当事業は変わらず順調に継続しています。



抗議行動 in 首都ブラジリア: アマゾンの森の守り人たちが大集結!

今年8~9月、全国から先住民族が首都ブラジリアに集結し、大統領官邸や国会前の広場を埋め尽くして抗議行動を展開しました。8月、117民族4000人が参加。続く9月には、172民族5000人の女性たちが「第2回・先住民族女性マーチ」を実現しました。現政権は先住民族保護区での開発を可能にするさまざまな法案を国会に提出しており、これに抗議するのが目的です。

主な法案は、(1)先住民族保護区内で先住民との協議なしに鉱山開発や電源開発ができる。(2)自然保護区や先住民族保護区に不法侵入して勝手に農牧場を切り拓いた人間に恩赦を与える、などです。なお連邦最高裁判所では、ある重要な裁判が進んでいます。民族集団が先住権を主張して保護区認定を求める土地が全国にまだ200ヶ所以上存在しますが、判決次第では、その認定が今後一切認められなくなるというものです。

(当団体支援対象地は保護区の認定が完了しています)



世論を、国を動かす先住民の声の力

ブラジリアに集結した先住民は、公園で野営しながら連日、集会やデモ行進、国会議員との折衝などを展開し、また弁護士資格を持つ先住民の若者たちが先住民族組織の顧問弁護団として連邦最高裁判所で意見陳述する場面もありました。抗議の力によって国会の法案審議と裁判の審議は延期が決まりました。

老若男女がそれぞれの個性を発揮して社会に訴える先住民の力強い姿に、ブラジル内外から賛同も多く集まっています。イギリスの大手スーパー・マーケットチェーンのように「法案が通ればアマゾン産の農産品の扱いを停止する」と宣言する企業も出てきました。アルミニウム、鉄、レアメタルなどの地下資源や、大豆などの農産品をブラジルから輸入する日本の私たちにとっても、これは決して無縁の問題ではありません。



メガロンが国会下院の場で法案反対を訴えました



家屋の全焼



消防団員



当団体支援対象地の 新型コロナ禍は収束方向へ

ブラジルの新型コロナ禍は、今年6月には1日の新規感染者が11万人、死者が4000人を超える日もありましたが、それ以降は徐々に減少を続けています。当団体の支援対象地では、幸いにも昨年末以降はウィルスの流行は確認されていません。しかし、外部の人間の先住民族保護区への立ち入りを制限する措置は、原則として今年いっぱい継続される見込みです。

リモートで現地支援を継続

現地訪問はかなわないものの、当団体ではこの間ずっとリモートによる支援を続けてきました。ここ数年、支援対象地の主要なコミュニティへの衛星インターネットの普及が進んだことから、スマートフォンの通話アプリを使った連絡が可能になっています。通信状態は良くないものの現地の彼らと直接、密にやり取りしながら、コロナ禍がもたらした人ととの距離を埋める作業を行なっています。